Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2026-04-08

花毛布の展示

(Citation)
海事博物館研究年報,50:46-46

(Issue Date)
2023-03-31

(Resource Type)
other

(Version)
Version of Record

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100482213

花毛布の展示

明海大学の上杉恵美教授、元海技教育機構の中村鎮生氏及び本学の服部恵理子氏のご協力で、現在でも客船や練習船などで寝具上に飾られる花毛布を季節ごとに展示することになりました。

花毛布の造形（海事博物館内）

ー花毛布についてー

「花毛布」（注）は、１枚の毛布で花や自然の風景、動物などの形を作って船室のベッドに飾る、日本船伝統のおもてなしである。

「花毛布」には、「扇」「松竹梅」「日の出」「菊水」「双子岩」「富士山」などの日本の伝統的デザインや、「桜」「兜」「牡丹」「水芭蕉」など季節感を表すものが多い。海に関連する「帆掛け船」や「波」「貝」などもある。ひだを作る、何層にも折りたたむ、角を生かすなど、折り方も多様で、「折り紙」という伝統を持つ日本人ならではの器用さが生かされている。

「花毛布」のもっとも古い記録は、1901年発行の『郵船図会』で紹介された日本郵船「春日丸」の船室イラストである。このことから「花毛布」は、1900年頃にはすでに始まっていたと推測される。1908年に運航が始まった青函連絡船にも、日本郵船から旧国鉄に移った船員により技術が伝えられ、「飾り毛布」と呼ばれた。船室に華やかさを添え、乗船客の心を和ませるため、客室係はベッドメークを済ませたあと、毎回毛布を違う形に折ってベッドの上に置いた。

1920年代から1930年代にかけて、「花毛布」は外洋航路と国内航路の多くの船舶に普及し、さまざまな等級の船室に飾られた。毛布の折り方は後輩船員が先輩船員の折る様子を見ながら習得し、自らの創意と工夫で形を発展させる、という方法で代々継承された。

太平洋戦争後、「花毛布」は長距離定期航路の廃止や業務の効率化などにより徐々に船上から姿を消していったが、船員を養成する練習船などでは、船長や機関長、一等航海士などの上級士官の居室に、敬意の表現として飾られてきた。

近年では商船三井客船のクルーズ船「にっぽん丸」など、ごく限られた船舶で「花毛布」のサービスが継承されている。練習船では一般公開や外部視察の際などに、船の伝統として披露されることがある。

（注）船会社によって呼び名が異なり、商船三井客船などでは「花毛布」、日本郵船・青函連絡船などでは「飾り毛布」と呼ばれていた。

明海大学 ホスピタリティ・ツーリズム学部　上杉 恵美